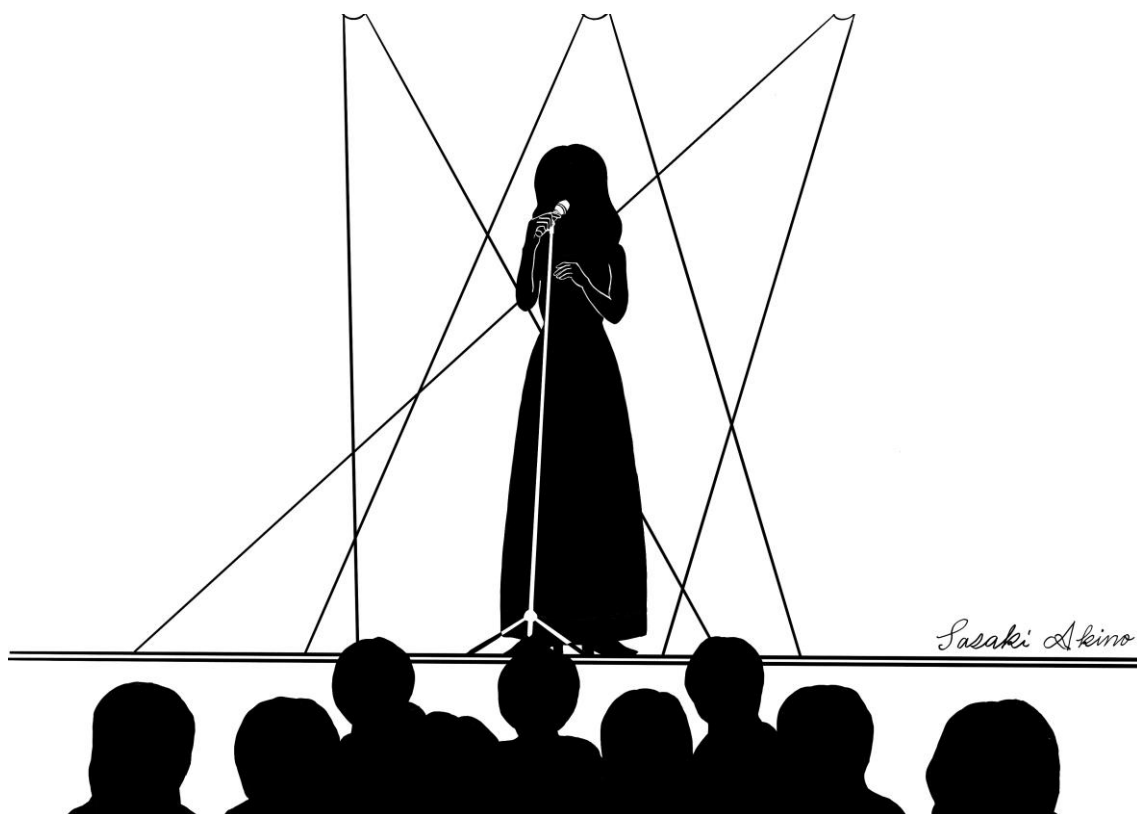


名曲シリーズ：ある女性歌手の物語



(Drawn by Akino SASAKI)

これは、ある女性歌手の物語です。



今日もステージの幕が開く。

私はいつものようにステージに立つ。スポットライトを浴びながら、口元に笑

みを浮かべて、恋の歌を歌う。私にとってそれはいつもと同じ日常だ。私の長年の夢だった歌手という仕事。新しく出した曲が大人気となって、私はテレビでも雑誌でも話題となった。街を歩いていても、みんなが振り返って、私を見た。

私は、今自分は人生の頂点にいる、という気持ちでいっぱいだった。やっと、やっと、自分の夢が叶った！そう、私は最高に幸せだったのだ、あの知らせが届くまでは・・・。

その手紙が届いたのは、一週間前のことだった。差出人の名前を見たとき、私の頭の中にはすぐに一つのイメージが浮かんだ。それは昔と変わらない、色鮮やかな写真のように、はっきりとしていた。

彼は私の手をしっかりと掴んで、その熱い愛情にあふれる眼差しで私を見つめていた。その目ははっきりと私に「行くな。」と言っていた。そして、私は心の中で叫んでいた。「あなたのことを愛している。それでも、私は行く。」そんな強い決意を持っていながら、私は彼に視線を合わせることができなかった。なぜなら、彼の傷ついた顔だけは見たくなかったから。そして、彼の目の中に映る、傷ついた私の姿を見たくなかったから。

彼の手を振り切って、私は動き始めた汽車に飛び乗った。彼はきっと、そのままプラットホームに立ち続けていたことだろう。私は後ろを振り返らなかった。でも、涙のにじむ目には、はっきりと彼の姿が浮かんでいた。

その手紙を手にとったとき、すごく嫌な予感がした。その手紙は普通の手紙ではなかった。まるで誰かの死を伝える知らせのように、手紙の縁が黒い。なぜ？ どうして？ 手紙を開ける手が少し震えてしまった。

中身を読んだ。最初は、意味がわからなかった。文字は読める。言葉もわかる。でも、意味がわからなかった。私は手紙を強く握りしめたまま、じっと立ちつくしていた。

彼の葬式の日、私は駅のプラットフォームに立っていた。彼と別れた場所だ。葬式の場所は、この駅から歩いてすぐの教会だ。駅は3年前とほとんど変わっていなかった。けれど、都会の生活に慣れてしまった私にとって、ほとんど乗客のいない静かな駅は、私の知っている場所とは思えなかった。

私はこの日のために用意した黒い喪服を着て、教会へ向かった。教会の前で私はずっと立っていた。中には入らなかった。いや、入れなかったのだ。彼の死が本当のことと思えなかった。現実だと思えなかった。彼の死を悲しむ涙も、彼の死に対する祈りの言葉も、私は失っていた。

私は駅へ戻った。駅の待合室で、次の汽車を待つ。人気歌手となった私には今晩のステージが待っている。また、恋の歌を歌わなければならない。たとえ、私とその恋を失ったとしても。

そのとき、駅のラジオから、私のヒット曲が流れてきた。私は、切ない声で甘い恋の歌を歌っていた。でも、一人きりの私には、その声が、歌が、他の知らない誰かが歌っている歌のように聞こえた。

今、私はスポットライトの下にいる。観客はみんな私を熱い目で見つめている。そして、私の恋の歌を心待ちしている。私は口に笑みを浮かべながら、歌い出す。



これは “喝采” という日本の歌の物語です。興味があれば、ぜひこの素敵な歌をインターネットで探して、聴いてみてください。

(1372 字)

(2021.4 Written by Yuki MORI)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.